

仲良くなろうよ

eri

夜明けは神妙な顔をして向こうからやってきた。耳を澄ますと、どこからか響く唸り声が窓の外の空気を震わせているのが分かる。私は毛布に包まったまま、光に満ちていく街をカーテンの隙間から見ていた。

ある朝、グレゴール・ザムザはなにか気がかりな夢から目をさますと、自分が寝床の中で一匹の巨大な虫に変わっているのを発見したが、私は夢なんて見なかったし巨大な虫にも変身しなかった。目覚ましは鳴るより少し早く起きたある朝、いつになっても母と父がリビングに降りて来なくて、今日から私の登校日なのに寝坊すけさんめ！ と寝室へ行ったがいない。あれれえ、と家の中をうろうろしたがやっぱりなくて、そういえば今日はいつもより外が静かだなあでも朝って静かなものだしなあ気のせいかなあと胸騒ぎを感じつつ、一人で朝ごはんを食べて学校へ向かった。もう高校二年生だしね！

あれれえ？ って本格的に思ったのは家を出てバス停に着いた頃だった。いつも朝早くから庭に水を撒いてる清水のおばちゃんも、犬の散歩というか犬に散歩されてる猿山のおじいちゃんもいなくて、街中がしんとしていた。誰もいない。七時二十分に来るはずのバスも来ない。抜け殻の街並み。集団登校の小学生たちの発する、わぎゃああうええぺっしゅうっていう奇声も聞こえなくて静かだ。

しばらく待ったがバスの来る気配が一向にないので仕方なく高校まで歩くことにする。ゆっくり歩いても一時間くらいで着くだろうから余裕だ。高校になら誰がいるかもしれない。始業式だし夏休みの課題を抱えて、まじ終わんなかったわあとかなんとか教室でみんな喋っているだろう。なんて現実味のある光景。自動販売機でVolvic from Franceを買って飲みながら歩く。

そして結局、いつも校門前で口煩くスカート丈をチェックする生徒指導の梶川もいなくて、しかし教室には美優がいた。おそろおそろ、二年二組の教室の扉を開けるとただ一人、美優が自分の席で顔を伏せていたのだった。

「さと子ちゃん？」

扉を開ける音を聞いて、美優は勢いよく顔を上げ私の方を見た。私は、ここにいるのが、たった一人でここにいるのが、他の誰でもなく美優でとても嬉しい。

「朝起きたら誰もいなくて……学校に行ったら誰がいるかなって思ったんだけど」

美優は現れた私を見てほっとしたように笑った。

「でも、とりあえずさと子ちゃんがいてよかった」

「私も美優ちゃんがいて本当によかったよ」

私はさり気なく美優の隣の席に座る。授業中に美優と内緒話や手紙交換をしている由香ちゃんの席。私はいつもそれを斜め後ろの離れた席から見ていた。美優と由香ちゃんの席は日光が程良く差し込んで暖かく、机の表面も滑らかだ。私は授業中いつも退屈で、カッターで彫られたような落書きをシャーペンでいじるから、私の机はところどころ黒ずんでいる。

「他に誰か会った？」

「ううん、会ってない。美優ちゃんだけ」

「そっか」

「どうしようね、これから」

そう私が言うと、美優は俯いた。

「もう少し待ったら、他にも誰か来るかも」

他にも誰か？ 来るとしたら誰だろう。美優と仲のいい由香ちゃんは、選択授業の美術のとき隣にイーゼルを立てるとこっちを見てくすくす笑うからあんまり好きじゃない。黒目が大きくて塗りつぶしたみたいに真っ黒に見える由香ちゃんの細い目はいかにも意地が悪そうだと思う。もう一人、美優と由香ちゃんのグループの萌絵ちゃんは茶色く染めた髪が下品。化粧も濃いいし、マスカラとアイラインで強化した目元は戦闘力が高そうで不自然だ。よく教室でふざけて「萌絵ちゃん萌え萌え～」とか言ってるけど、全然かわいくない。

「さっきから由香とか萌絵にメールしてるんだけど返信来ないの。さと子ちゃんさ、誰かに連絡取れないかな」

美優に顔を覗き込まれ、慌てて携帯を開く。アドレス帳のア行から順に見ていくが、誰にメールすればいいのか分からない。私と仲が良い子って誰だっけ。

石井春菜は同じ放送委員会に所属していて放送コンクールの時期には一緒に番組構成を考えたいけれど、今は廊下ですれ違っても特に言葉は交わさない。小島聡美は中学生のころはそこそこ仲良かった気がする、でも商業高校に行ってから派手になっただけで連絡しようと思わない。杉岡真理は私の所属する演劇部の先輩で、戯曲の解釈を得意顔で説明するところが好きじゃない。高木成海、中二のときの口煩いくせにすぐ泣く学級委員長。西村里奈は家が近くて家族ぐるみで付き合いがあるけど、高校生になってからあんまり顔を合わせなくなった。古川達也は高校の入学式の時浮かれ気分で喋ってメアド交換した。だけど全然メールしないしノリが軽すぎて無理だしそもそも男子ってなんか馬鹿っぽくて無理無理。村上愛は同じクラスで、だいたい平淡な顔の人間を雑な線でルーズリーフに描いているか、オタク仲間たちと「愛ちゃんおっぱいおっきいじゃあん」「えー似合う服が無くて大変なんだよう」ってやたら通る声で喋ってるかで気持ち悪い。なんでああいうオタク民族ってみんな早口で語尾にござるとか付けそうな抑揚で喋るんだろう。山中麻衣もオタク民族の一人で、卑猥な単語の羅列されたタイトルのライトノベルを持ってきて、脇役の美少女キャラの死に際の台詞の切なさとか作中の下ネタの面白さとかについて大声で喋って、その卑猥な単語を恥ずかしげもなく口に出せる私カッコイイみたいな空気が嫌だった。

「ラ行の欄が空っぽだ」

アドレス帳を適当にスクロールしながら私がそう呟くと、美優も自分の携帯を操作して笑った。

「ほんとだ、うちの家族しかない」

「そっか、六郷だもんね」

「ラ行の苗字って珍しいのかな。そうだ、さと子ちゃんメアド交換しようよ」

私のラ行に六郷美優の名前が追加される。たった一人のラ行。ラ・リ・ル・レ・ロって鈴のような澄んだ金属音を連想させるし、六郷美優って女優さんみたいな名前も私の中の美優を煌めかせる。女優さんがラメラメのパウダーで肌を発光させるように、美優はすっぴんだけで柔らかい

光に包まれていて特別だ。

美優の特別さを思うとき、必ず私の頭を過るシーンがある。去年の秋の文化祭、私が美優に出会った瞬間。

二年に一度の文化祭前日の夜、さあて明日に備えて早めに寝ようかなとベッドに潜り込んだ私の携帯が何度も鳴った。差出人はクラスの友人から部活の先輩など様々で、内容はみんな一緒だった。

『件名、みんなにまわしてください！』

内容はチアリーディング同好会の後夜祭での発表についてだった。リハーサルで待機している同好会の生徒たちの態度が悪く、怒った文化祭実行委員会が後夜祭での発表を取り消したらしい。自業自得だろと思う半分、そんな今まで練習してただろうに前日に取り消さなくたってとも思う。当日の朝に同好会の生徒たちが、発表取り消しの取り消しのための署名を集めるから協力してほしい。そういうメールが何通もまわってきた。文化祭実行委員会は主に夏の大会が終わり部活を引退してやることの無くなった運動部三年生の「高校最後の文化祭を一層盛り上げていこうぜ！ 最高の思い出作ろうぜ！」というテンションを集めて出来た集団で、当日のスケジュールからクラスごとの予算配分、記念グッズのデザインなどあらゆることを仕切っていた。でも勢いで突っ走るから細かいところに綻びがあり、演劇部の教室公演も華道部の作品発表と教室が被っていて、部長が文句を言ったのだった。それから何度か確認に実行委員が演劇部へ顔を出したが、青春の空気に浮かれきった体育会系の生徒は地味な文化部の生徒を馬鹿にしがちで、私もそのときの実行委員の偉そうな物言いにむっとした。

チアリーディング同好会は顧問がないので生徒会規則により同好会で、生徒たちは派手に校則違反の化粧をして髪を染め、普段から生徒会や先生に目を付けられていた。発表も部活紹介のときに見たけれど、流行のアイドルのダンスを継ぎはぎしたような振りでチアらしさはあまり無かった。チアの声も小さいが、普段の同好会の生徒たちの笑い声はうるさく下品で、リハーサルの待機中もそうして騒いでいたんだろう。

確かに発表を取り消された同好会はかわいそうだけど同好会の子たちってギャルっぽくて好きじゃないし、正直どうだっていいよと思いながら、当日の朝、始発のバスで登校した。美術部の作った歓迎門をくぐり抜けると朝のすっきりとした光を浴びた校舎が凜と建っていて、教室の窓ガラスに張られた色とりどりの画用紙ばかりがはしゃいでいてちぐはぐだった。それでもお祭りの気配に胸は高鳴る。

「あの、チアリーディング同好会なんですけど」

下駄箱で靴を履きかえた私の元に、派手な化粧をした生徒が一人来た。私が向き直るとその生徒は少し声を上擦らせる。「今、後夜祭のチア発表の取り消しに反対する署名を集めててあの協力してほしいんですけど」

「ああ、はい、メール見ました」

目の前に来られては仕方ないなとペンを借り、差し出されたノートに名前を書く。署名表には一年生から三年生まで名前が連なっていて、署名お願いしまーすとノート片手に声を張り上げている生徒も何人かいるのできつと十分な数が集まるだろうと書きながら思った。

はい、と書き終わってペンを返しながらか、その生徒の顔を改めて見た。濃い化粧のせいで素顔はよく分からないが少し目が潤んでいて、思わず見つめあう。「本当にありがとうございました」嘸みしめるように言われた言葉に、私も「頑張つてね」と声が漏れる。

それから私は、じん、と胸の奥底が震えるのを感じながら演劇部の公演の準備をする。演目は『オズの魔法使い』だ。役があるのは先輩たちだけで、私は小道具や衣装を準備する当番だった。ドロシーの履く銀の靴は、私の古いローファーをスプレーで塗つて作つた。ちょっと安っぽいけどかわいくてお気に入り、メイクをして衣装を身に付けた先輩のドロシー姿を携帯で撮っていると、文化祭開場のアナウンスが聞こえてくる。

いざ公演が始まると、当日は受付と入場整理しかやることが無くて少しだけ退屈だった。廊下で開演時刻を書いたプラカードを持ちながら、教室から漏れて聴こえる『Over the Rainbow』を口ずさむ。

サムウェーオーヴァザレインボー……。

それで楽しかったんだか退屈だったんだかなんだか分からないまま文化祭は終わつてしまつて、私は後夜祭のチアリーディング部ステージ発表を観に行く。いつものなんてことないダンスだったけれど、ひと事件あつただけに食い入るように観てしまつて、じん、とまた胸が震えた。音楽が止んで盛大な拍手の音に包まれ、ステージ上で同好会の会長が一步前に出て「ありがとうございました！」と叫ぶ。拍手をしながら、私は今朝の「本当にありがとうございました」の声、涙を堪える目を思い出して、会長に合わせて笑顔で礼をした一人の生徒から目を離せなくなる。

顔を上げた彼女はやはり笑顔だったが、目から涙が伝つていたからだ。チアの衣装から伸びる白く真っ直ぐな手足や、星飾りの付いたシュシュで結んだふわふわの茶色い髪が人形のような。しかし、私が今朝確かに感じた、そして今感じている彼女の中の熱量が、彼女は確かに生きている人間なのだと私の胸の中で叫ぶ。

彼女は涙を流しながらも齒を食いしばり、笑顔を作り続けた。ステージの上では笑つていなくてはいけない。そして彼女の代わりに、気が付くと私が泣いている。

美優と教室で二人きりのまま昼が過ぎ、陽も落ち始めていた。他に誰も現れず、携帯に連絡もなかった。私は美優になんて話しかけたらいいのか分からず黙り、美優もあまり喋らず、夏休みの課題でやり残した数学のワークを二人で進めた。

「由香がいたら教えてもらえるんだけどな」

ベクトル問題とにらめっこしながら美優が呟くたびに、私は苦笑いを返した。一緒に考えよ、と言いたいけれど私だって数学が得意なわけじゃないし、だいたいこんな状況でワークをやること自体おかしい。美優は私といて退屈している。そう思えば思うほど時間が長く感じて、なおさらベクトル式に集中してやり過ごすしかなかった。

「そろそろ帰る？」

夕日が窓から差し込み黒板に反射しているのを眺めながら美優に声をかける。美優は頷いて鞆にワークと筆記用具を詰め出した。

「駅まで一緒に帰る？」

「さと子ちゃん家どこ？」

「好間。歩いて一時間くらい」

「あたし中央台なんだ。自転車で一時間と少しかかるかな」

「自転車で来てるんだ、いつも？」

「雨が降ってるときはバスだよ」

私は美優が自転車を出すのを待って、それから学校から駅までの道を三十分かけて歩いた。美優は自転車を押しながらなので私が普通に歩くよりも少し遅くて、だから私は美優のスピードに合わせて一步一步リズムをとった。とん、とん、とん、と歩くと、去年の『オズの魔法使い』の公演を思い出す。かかとを三回鳴らしたら元の居場所へ戻ってしまう、ドロシーの魔法の銀の靴。

「でもさ」唐突に美優が言う。「こうやってさと子ちゃんと二人で喋るのって初めてだよね」

「そうだね」と私は自然に答える。「初めてかもね」

「同じクラスなのにね。さと子ちゃんって何部だっけ」

「演劇部だよ」

「あたし演劇部の公演って観たことないなあ」

「校内で発表するのは文化祭くらいしか無いもんね。私、チアの発表観たことあるよ。後夜祭の」

「ああ、去年のね」恥ずかしそうに笑う美優。「あたし泣いちゃってさ」

「うん」知ってる。

「あのとき大変だったなあ。朝から署名集めて走り回って、署名してくれて『頑張ってるね』とか言ってくれる人もいて、嬉しかった」

「うん」

「いい文化祭だったよね」

私は何度も頷いた。美優の心に私との出会いが刻まれている可能性を思うと、自分の身体を抱きしめたくなる。

「明日も学校に来る？」

駅前に着いて、自転車に跨りながら美優が言った。夜が近付いて薄暗いのに駅や駅前のお店の電気は付かず、等間隔に立つ街灯だけが心許無く瞬いている。

「行く」

美優は安心したように、よかったと呟いて、ばいばいと言い残し自転車を漕ぎ出した。私も美優の背中に向かって、ばいばい、と言う。遠ざかる姿を見つめながら、美優が「淋しいからさと子ちゃんの家泊まっていい？」と言ってくれたらどんなに良かったらと思う。ひゅーう、と風が鳴る。美優がいなくなると世界はこんなにも空っぽなのだ。

ただいま、と言って玄関を開けても返ってくる声は無く、電気を点けると家の中は今朝のまままだ。

自分の部屋で鞆を降ろし部屋着に着替える。そろそろ美優も家に着いたころかなと携帯を確認

するが、メールは来ていない。帰ったらメールしてって言えば良かった。帰ったらメールするねって言ってくれたら良かった。

美優は中央台に住んでいると言った。福島県いわき市は大きな駅ビルもスターバックスコーヒーの店舗も無い結構な田舎だけど、中央台は駅から離れた高台に出来たニュータウンだ。お洒落な住宅地と緑に囲まれた広い道路、そこに架かる大きな歩道橋はカラーアスファルトで舗装され、中央台小学校はピンク色の校舎に緑色の屋根で、街全体がカラフルだからまったくもって寂びれる気配が無い。内科や眼科、耳鼻科の医院が寄せ集まった医者村があり、中央台には医者の家系でお金持ちの家が多いともっぱらの噂。ときどきふざけた誰かが中央台を天空の城と呼ぶ。

それに比べて私の住む好間は駅には近いが、おんぼろ商店かヤンキーの集うカラオケ店くらいしかお店が無くて、道路はガタガタ。歩道橋は錆びが酷く、小学校は田んぼに囲まれていていかにも田舎だ。美優が私の家に泊まりたいと言わなかったのは、もしかしたら良いことだったのかも知れない。でも、やっぱり淋しかったら私の家に来ていいよ、美優。さと子ちゃん家ってこんな感じなんだあって話しながら一緒にご飯を作って食べて、仲良くなるよ。

私は携帯電話を握りしめたままベッドに潜り込んだ。枕元のテディベアを抱き寄せると少しだけ安心する。小学生のころ遠くのテーマパークに連れて行ってもらったときに売店で見つけたピンク色の可愛いクマで、抱きしめると柔らかい。毎晩一緒に眠り何度も洗濯をしたのでだんだん腕や尻尾のあたりがほつれてきて、母には「そろそろ捨てたら？」と言われるがまだ捨てるつもりはなかった。

目が覚めると二十一時を回っていて、どうしようもなくお腹が減っている。リビングに降りてカップラーメンを作りテレビを点けた。チャンネルをまわすと、顔が整っているだけの女優と俳優の競演するドラマやマニアックな問題ばかり出すスポーツクイズ番組など次々に画面が切り替わり、生放送の音楽番組を見つける。

ポジティブさを寄せ集めたようなアイドルたちの歌を聴きながらカップラーメンを啜る。画面の右上にLIVEの文字が揺らめいているから、きっと今、東京にはたくさんの方がいるんだろうと思う。確かに存在するはずのアイドルや司会の芸能人、しかしいくら画面を見つめても現実味がなく、カップラーメンの単調な味だけが今の私にとってのリアルだ。

美優からのメールが来ないまま朝は来て、私は高校へ行く。教室には九時過ぎに着いたが美優はまだ来ていなかった。私は由香ちゃんの席で数学のワークと参考書を眺めながら過ごし、お昼を過ぎたころ美優が顔を出す。

「ごめんね、昨日こわくて眠れなかったの。朝方にやっと少し眠れて」

「そっか、私も夜はこわかった」

「テレビでいろいろやってたからそれを観てたらちょっと安心したけど」

疲れたように笑いながら、美優は自分の席に座る。

「昨日の音楽番組に、あたしの好きなアイドルグループ出ててさ、さと子ちゃん観た？」

「あの生放送だったやつ？」

「そうそう。生放送ってことは、そのときちゃんとその人たちは存在してるってことじゃん。すごい安心感だよ」

美優が脚をぱたぱた揺らしながら話すのを、私は笑顔を作って聞く。

「あたし、あのアイドルの握手会にもう五回くらい行ったことあるんだよ。デビューしたばかりのころとか、ファンも少なかったから握手しながらいろいろ喋ってさ。ファンレターとプレゼント送ったら公式ブログの写真に写ってて、ああちゃんと繋がってるんだなって」

ああ、うん、分かる分かる。私は相槌を打ちながら、去年の文化祭のことを思い出している。笑顔が強張っていることに気付いてしまったら、笑い続けるのはとても難しい。

「あのさ」笑顔を張り付けたまま、私は美優の話を守る。「昨日、美優ちゃん、私と二人で喋るの初めてって言ったけど、本当は初めてじゃないんだよ」

そうだった？ と美優が首を傾げる。

美優と話したことは二回ある。一回目は初対面、一年生の文化祭のときで、二回目はその後の冬だ。

一年生は総合学習のカリキュラムで幼稚園や保育園へ実習に行かなくてはならなかった。その日は体育館で学年集会が行われ、実習先に迷惑をかけないように注意事項を学年主任が読み上げた。そんなことわざわざ説明されなくても、と思いながら聞いていると、一通り説明を終えた先生が突然明るい声を出した。

「じゃあね、最後にね、実習先で子どもたちと楽しく遊べるようなお遊戯を紹介するからね。みんなで作ってみよう」

えー、という声やくすくす笑いが生徒たちから漏れ、学年の先生たちが照れ笑いをしながらステージに上がり輪になる。音楽の先生が、ン、ジャ、ン、ジャ、とリズム良くピアノを弾き始めると、先生たちはステップを踏みながらペアを作って向かい合い、アルプス一万尺の振りのように手と手を合わせた。一通り終わるとフォークダンスの要領でペアを替えて、また同じ振り。大げさな身振りで踊る先生たちを見て生徒たちは楽しそうに笑う。

「ほら、みんなも輪になって先生たちの真似して！」

学年主任の掛け声にそれまで体育座りしていた生徒たちは立ち上がり、大きな輪を作って踊り始めた。私も突然の愉快的な空気に吞まれ輪に加わって、知っている女の子や知らない男の子と、楽しさと照れ臭さを共有しながら手を合わせる。

二回続けて隣のクラスの男の子と踊ったあと、次にペアになった女の子の顔を見て私は、あ、と呟いた。私の声にその女の子は、ん？ と微笑む。

「チアの子だよ？」手を合わせながら言うと、声が妙に高くなって顔が熱くなった。

「うん、そう」

「後夜祭の発表、すごく良かったよ」

「ほんと？」

女の子が一層大きく笑って、「ありがと」と言う。私も嬉しくて笑うが、すぐにペア交代のタイミングが来る。私はその後何度もペアを交代し手と手を合わせながら、ちらちらとその子の後

ろ姿を見ていた。

「覚えてる？」私が震える声で言うと、美優は視線を泳がせて、ごめんね、と困った顔をする。

「覚えてないや、あのときなんか、はしゃいでたし」

「そっか、そうだよ、気にしないで」

言いながら、もう自分が全然笑えていないことに私は気付いて、思わず唇を噛みしめる。美優が「ちょっと自販機行ってくるね」と教室から出ていく。

出て行ったまま、五分、十分、十五分と経ったが美優は教室に戻って来なかった。私は机に顔を伏せ、静かに泣く。

泣きながら、今まで自分が大切に温めていた美優との数秒間が繰り返し脳内で反芻され、涙と共に零れ落ちていった。存分に泣いたと思ったのに、顔を上げると頬も机もあまり濡れていない。

しばらく経ってようやく美優は教室に戻ってきた。自分の席に座ってシャープペンシルで机の傷をいじっている私の肩を叩く。

「帰ろっか」

「うん」

私と美優は鞆を持って廊下に出た。昇降口に向かいながら、美優が呟く。

「でも、なんで私とさと子ちゃんなんだろうね」

私はちょっと悩んで、それから「分かんない」と答えた。その瞬間、ごおおおうと唸り声のような音が響いて空気を震わせる。

人の波だ。瞬きした途端に廊下には制服を着た男女が流れるように溢れだす。驚いて立ち止まる私と、波に流されてどんどん遠ざかる美優。静かで空っぽだった空間に喧騒が戻ってきて、私は再び埋没していく。

遠くから私の名前を呼ぶ美優の声が聞こえた気がするけれど、きっと気のせいなんだろう。

埋没した私はそれまでと変わらない生活に戻ったし、美優も相変わらず由香ちゃんや萌絵ちゃんの派手なグループにいた。席替えのたびに席が近付いたり遠ざかったりして、グループ学習で同じグループになるとそれなりに喋り、でもそれ以外だとほとんど喋らなかった。

三年生になるときのクラス替えで、私たちは別のクラスになった。クラスが離れると滅多に顔を合わせなくなり、あまり美優のことを考えなくなった。

新しいクラスや演劇部の公演などで友人も増え、携帯のアドレス帳の登録件数も増えたが、未だにラ行は六郷美優の名前だけだ。やっぱりラ行の苗字って珍しいんだなあ。

とかなんとか思っていると、演劇部に竜崎やよいという名前の一年生が入部する。

「ラ行の苗字って珍しいよね」

そう私が言うと、竜崎やよいは携帯を操作して「いや、結構わたしの友達いますよ。力村とか論田とか」と言い、「民主党の蓮舂さんも！」と声を上げた。ラ行の神聖さがどんどん薄まっ

ていって、私は笑いながらちょっと自分に呆れる。でも蓮舫さんの本名は村田蓮舫だよ。

そして駆け足で時間が通り過ぎていって、二年に一度の文化祭の季節がやってきた。私は演劇部の公演とクラス企画のお化け屋敷の準備で大忙しで、実行委員は今年も偉そうで何か言われるたびにむっとしてしまふ。それでも話し合いをして頼み込み、なんとか今年の演劇部は教室公演ではなくステージ公演にしてもらった。やったね！

演劇の戯曲は部員の子が考えたオリジナルで、当たり触りの無い友情物語だ。台詞の少ない脇役だけど私も役を貰えて、張り切って練習する。ただ物語があまりにも当たり触り無くて、ぎりぎりまでタイトルが決まらなかった。どうしよう、と言われて、思い付きで案を出すとあっさりそれに決まる。

仲良くなるうよ。

前日の夜、わくわくしながらベッドに潜ると携帯が鳴って、二年前と同じようなメールを何通も受信する。

実行委員会に後夜祭のチア発表を取り消されてしまいました！ 反対署名の協力お願いします！

もうこれ恒例行事なんだなあと苦笑してしまう。そして六郷美優からも同じようなメールを受信していたことに気付いた。私は迷って、でも結局「分かった。明日頑張ってるね」と返信し、テディベアを抱かずに眠る。

始発のバスで登校すると、校舎は朝の光に包まれてやっぱり凜と建っていた。迫りくるお祭りの気配！

「あの、チアリーディング同好会なんですけど」

昇降口で声をかけられ振り返ると、知らない女の子がペンとノートを持って泣きそうな顔で立っていた。

「いいよ」

私はペンを受け取ってノートに名前を書きながら、「一年生？」と訊く。

「はい」

「そっか、頑張ってるね」

ノートとペンを返してそっと肩を叩くと、「ありがとうございます！」と頭を下げられる。

それから私は、演劇部の公演でステージに立つ。

教室公演とは違って照明も音響もきちんとあるし、バンド発表の後なので観客もたくさんいて嬉しい。私は緊張で何度も噛むが、みんなにフォローされて最後まで演じきる。

拍手の波に包まれて、自分の輪郭がはっきりしていくのを実感する。じん、と胸が、いや身体中が震えている。おいおいこりゃ泣いちゃうよとか思うと本当に目が潤んできて、涙が頬を伝った。でも嬉しくて顔は笑ったまま、観客席を見渡した。そして観客の中に美優を見つける。

目が合う。

溢れ出す拍手の波の中で、美優は口を大きく開いた。

「さと子ちゃん！」

